日本道徳教育方法学会 第２回オンラインセミナー報告

道徳（科）における
教材論と授業論のこれまでとこれから

第２回オンラインセミナー「道徳（科）における教材論と授業論のこれまでとこれから」をふりかえって

谷田 増幸（兵庫教育大学）

日本道徳教育方法学会主催による第２回オンラインセミナーが「道徳（科）における教材論と授業論のこれまでとこれから」のテーマのもと，2021 年 11 月 28 日（日）13:00 から行われました。

堺正之副会長による開会のあいさつに始まり，馬場勝会員からは「道徳（科）における教材論と授業論のこれまで」と題して講演があり，それを受けて参加者のみなさまとの意見交流を含めおおよそ１時間半ほど（馬場会員と私との）対談が行われました。講演では馬場会員から道徳科の設置に至る経緯について，行政的な分岐点を辿りながらその間の授業論や資料論の展開について丁寧なご報告をいただきました。ここでは当日そのあとどのような対談の流れとなったのか，記憶を辿りながら簡単に振り返ってみたいと思います。

（1）馬場会員が「道徳科教科書」に見られる指導内容と指導方法に関する特質について観点を絞って例示されましたので，まず私から「考え，議論する」道徳科を企図した教材や学習の手引きは一体どのように捉えたらよいのか再度確認の意味を込めてお尋ねしました。もっとも「考え，議論する」道徳科成立にかかわる点については柴原弘志会員，早川裕隆会員から（その背景なども含め）コメントをいただきました。また，馬場会員の示した観点設定の在り方についてはあと島恒生会員からも質問がありました。

（2）次に，今回は教材論と授業論がテーマに挙がっていましたので，議論の前提として，そもそも道徳科における「目標」「内容」「方法」「教材」の４つの関係や位相をどう捉えたらよいのか，馬場会員にお尋ねしました。それに対して馬場会員は，いわゆる内容教科と対比させながら，道徳科では「「内容」（ここでは「内容」＝「内容項目」と措定）を手掛かりに「目標」を高める（子どもの力にする）のが「方法」」（下線筆者）であると説明されました。この「手掛かり」という語はこの点を説明する際に頻繁に用いられ，わかるようでわかりづらいマジックワードでもあることが気になりつつも，これ以上その概念そのものを追究することは生産的ではないと考え，その場では互いの矛を収めることとしました。

（3）馬場会員はここから今回のテーマに具体的に切り込んで行かれました。つまり，「「内容」を手掛かりに」ということからそのことを考える手立てとして，食材と料理のアナロジー（Analogy）を用いて「教材」のつくりに係るモデル図を大胆にも提示されました。例えば，次のような分類になります。

❶ 「内容」重視型【食材のみ提供型】

ここでは，さらに「足袋の季節」のような【天然・自然の食材型】と
文部（科学）省「小学校道徳読み物資料集」のような【養殖・ハウス栽培の食材型】分類

❷ 「内容」＋「しかけ」型【下ごしらえされた食材提供型】

文部科学省 H.24 年「中学校道徳読み物資料集」の一部教材など

❸ 「内容」＋「方法」型【調理済みの料理提供型】

発問や学習の手引きで「学習方法」を規定するなど

もちろん，これはあくまでも一つの思考実験とのことでしたが，私にとっても興味深い内容でした。この点については，磯部一雄会員，木下美紀会員，杉中康平会員それぞれのお立場から実践に即した鋭いコメントを頂戴できました。

（4）けれども，ここまでは学習指導要領等の規定に沿った枠組みでの議論でした。研究や実践の場ではさまざまな教材や授業方法が開発されつつあります。そこで，私から教材や授業を規定する「内容」や「方法」を捉え直すこと，言い換えれば相対化することの可能性について伺いました。すると，馬場会員は「教える内容の正当性の有無」を縦軸に，「教え（られ）る，教え（られ）ない」を横軸にした４象限のモデル図を提示されました。学術会議「報告」等を踏まえ，モデル図の是非，「内容」の存在や正当性についての議論へと展開されるべき内容でした。馬場会員が課題意識を持たれ，私も悩ましく思っていたことの一つとして，「哲学対話（p4c も含めて）」がどの象限をカバーすることになるのかが気にかかりました。そこで，上村崇会員，高宮正貴会員，またこの分野に詳しい山田圭一氏（千葉大学）や森秀樹氏（兵庫教育大学）からコメントを頂戴することができました。ここではそれらをまとめることなどできませんが，４象限の軸の設定，配置の在り方も含め，あらためて思考の柔軟性（flexibility）が求められることを感じました。

（5）残りの時間は限られていましたが，デジタル化が急速に進展するなかで，馬場会員には「これから」についても語っていただきました。ここまでの講演や対談の中で馬場会員は，「道徳の世界における自明とみなされていること」を今一度括弧に入れ相対的に捉え直し，先生方ご自身が真摯に，そしてクリティカルに教材や授業に向き合うことの必要性を一貫して主張されていたのではないかと思います。最後の意見交流の場では，永田繁雄会員，渡邉満会員，またこの分野にご造詣の深い氣多雅子氏（京都大学（名誉教授）），横山利弘氏（元関西学院大学）からも総括的なコメントを頂戴することができました。

閉会のあいさつでは，堺正之副会長から本日のセミナーの要点と今後の課題について簡潔にまとめていただき，15:10 には終了することができました。その後も 60 名あまりのみなさまが残られて 16:00 まで和やかな雰囲気の中で懇談が行われました。

参加者は，234 名（会員 80 名，非会員 154 名）で，そのうち 62 名からアンケートのご回答をいただきました。今回のオンラインセミナーについて「非常に満足した」「満足した」が 52 名，「どちらでもない」が 10 名，今回のオンラインセミナーの内容で自身の実践や研究等に役立つところが「非常にあった」「あった」が 49 名，「どちらでもない」が 12 名，「あまりなかった」が 1 名でした。このアンケートの結果を踏まえ，さらに改善・充実を図っていきたいと考えます。なお，チャットでのコメントやご質問も多くいただきましたが，その場で十分に反映させることができませんでした。それについても今後の課題とさせてください。

最後に，参加者からいただいた感想をいくつか紹介させていただきます。

- ○ 「道徳」の「教科化」に至るまでの経緯を分かりやすく説明いただき，勉強になりました。
- ○ 道徳教育論のなかで用いられる概念（「内容」「手がかり」「価値」「コンピテンシー」「教える」等々）を理解することの難しさ。
- ○ 学習指導要領の規定が，道徳性を養うから，資質・能力が加わって，変化しているものがあるように感じました。
- ○ 他教科との「内容」や「目標」の在り方について，違うことを改めて考え直しました。
- ○ 教材論と授業論についての話題。大変興味深かったです。時間があればもう少し議論を聞きたかったと思いました。
- ○ 馬場先生のしめしてくださった内容を手掛かりとする道徳教材との関連に関わるモデルが大変参考になりました。
- ○ 学習論との関連で教材の分類を示さないと，あまり意味がないように思いました。
- ○ 教科書に掲載されている教材だけでなく，現代的諸課題を扱う際に気を付けるべきことは何かについてもう少し考えてみたいです。
- ○ 馬場先生の４区分。どんなに素敵な教材をねらいとする内容項目に向かって授業をしても，教師力がしっかりしていないといいものはできないと思います。（以後，略）
- ○ 普段私たち教員が当たり前のように使っている教材や用語に関して，その意味をもっと見直して（理解を深めて）いくべきだと思いました。

第２回オンラインセミナー「道徳（科）における教材論と授業論のこれまでとこれから」を終えて

馬場 勝（文部科学省）

2021 年 11 月 28 日（日）開催の第２回オンラインセミナーでは，貴重な勉強の機会をいただきました。

セミナーの準備として，４月から毎月一度３時間ずつ，道徳の授業論や教材論，また，そこから話題がひろがり教育全般の様々な事柄について，谷田会長と二人でオンライン対話を行う機会を頂戴し，毎回多くの貴重なご教示をいただきました。その対話の中から，講演でお話しさせていただいた「道徳科教科書」の成立過程等に係る考察や，対談の切り口として提示させていただいた「モデル」の構想が生み出されました。

前半の講演では，「『道徳科教科書』の特質には，『読み物』中心の教材内容」に「『考え，議論』を志向した指導方法」が加わったその成立過程が大きな影響を与えている，という趣旨の拙考についてお話をさせていただきました。後半の対談では，ご参加いただいた多くの先生方から貴重なご示唆を頂戴し，果敢にも「モデル」を示したことの無鉄砲さをその場になってひしひしと感じていました。当日は緊張のあまり，対談でお伝えしきれなかったことを以下に記させていただきます。お断りさせていただきますが，ここに記す拙考は，所属する機関の公的見解ではなく，個人的見解によるものです。また，それらは，今後，所属機関の公的見解になんら影響を与えるものではありません。

Ⅰ 「食材と料理のアナロジー（Analogy）モデル」をめぐって

最初は，「食材と料理のアナロジー（Analogy）モデル」（以下，「食材モデル」という。）についてです（概要は上欄の谷田会長がお記しになった❶～❸をご覧ください。）。

まず，「小（中）学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別の教科 道徳編」（以下，「解説」という。）に「内容項目は，児童(生徒)自らが道徳性を養うための手掛かりとなるものである。」と説明されているように，「内容」を「手掛かり」にして「目標」を高める（子どもの力にする）手段が「方法」であるという捉えを措定しました。そして，「教材」との関係については，「解説」に「道徳科においては一定の道徳的価値を含んだねらいを達成するための授業を展開することから，教材には適切な道徳的価値に関わる事象や人物が取り上げられていることが必要である。」と説明されており，「『内容』をどのように『手掛かり』として落とし込んでいくのか」が道徳教材の「つくり」の重要な要素であると考え，その類型を「食材モデル」として示しました。

実際に教材を作成する際の問題として，【天然・自然の食材型】の「内容項目の教材への組込み」と【食材のみ提供型】の「感動的な教材内容」のどちらの要素を優先するのかということがあると思います。後者については，「読み物教材」では「『感動』させる」ことに主眼を置くよりも，いわゆる「教材の具備する要件」の趣旨からも「人間を描く」ことの大切さを重視すべきと考えます。「教育は人間を教育するという行為そのものにおいて，まさに人間を解釈している。」というランゲフェルドの言葉が示すように，教育が人間形成の営みであり，究極の目的が人間性（人格）の完成にある以上，「人間をいかなるものとして把握するか。」という人間観の問題は，道徳科の授業においても最も重要なものであると考えます。「人間というものを読む」を可能にする教材の在り方を考えることが優先されるべきではないでしょうか。

このことについて，遠藤周作氏は，「（前略）人間の内面というのは一筋縄では捉えられないものだと，『テレーズ・デスケルウ』を書いたモーリヤック以後の小説家は，もう『Ａという心理があるからＡ’という行為をした』という書き方はできなくなっちゃった。」（『人生の踏絵』）と記しています。「一筋縄では捉えられない」という人間観は，「人間というものを読む」という道徳教材の問題について大きな示唆を我々に与えていると思います。

【食材のみ提供型】の説明で，「足袋の季節」を教材例としてあげました。「足袋の季節」は，昭和 38 年の月刊誌『PHP』掲載の中江良夫氏の作品を，昭和 39 年発刊『中学校 道徳の指導資料 第Ⅰ集』で「心の中のたたかい」という指導案での２時間目の資料として掲載されました。『PHP』の昭和 52 年再掲載を出典とする教科書もありますが，全教科書に掲載されている道徳教材です。発行者さんによって少し表現を変えている部分もありますが，この教材の特徴は，「天然素材を生育途中から枠に入れて栽培した」ような，つまり道徳的価値を記述変更によって強調する等の手を加えたものが少ない「自然に近い味」ということにあるといえます。具体の記述では，果物籠を投げた行為（投げる瞬間）そのものが実に人間的な姿であるという見方もできると思います。全発行者さんとも，中江良夫氏の原作の表現「持っていた果物籠を川に落としてやった」と記述しています。この「してやった」という表現が，「私」という人間を人間らしく描いているこの教材の文学作品として，そして道徳教材としての特徴的な点と捉えることができるのではないでしょうか。「落とした」と「落としてやった」では「人間の内面というのは一筋縄では捉えられないものだ」という人間の奥深さやおもしろさを味わうのには大きな違いがあると考えます。道徳教材の活用では，この味わいを大切にした授業展開が，教材作成では，このような味わいをもたらす表現の徹底した練り上げが，「人間というものを読む」深い道徳授業を可能にすると思います。

また，「人間を描く」が，道徳的価値に内在する多義性を浮かび上がらせることにも着目すべきではないでしょうか。静的な「言葉」で内容項目（道徳的価値）を説明するのではなく，生きている人間の姿を通してその意味（解釈）を浮かび上がらせ，「内容項目の教材への組込み」と「感動的な教材内容」をともに充足することが読み物教材の本来の重要な特質であると考えます。

２　「４象限のモデル」をめぐって

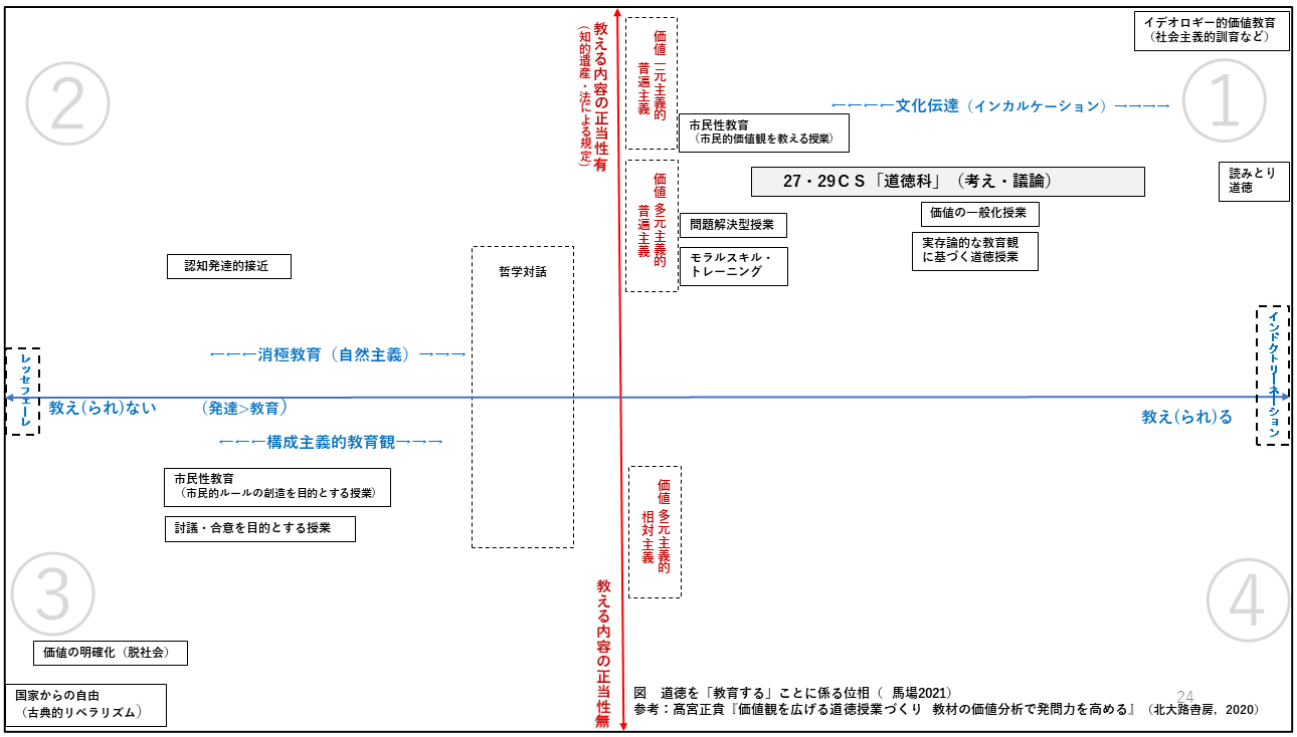

図　道徳を「教育する」ことに係る位相（ 馬場2021）
参考：高宮正貴『価値観を広げる道徳授業づくり 教材の価値分析で発問力を高める』（北大路書房，2020）

次に，「４象限のモデル」についてです。上述の「食材と料理のアナロジー（Analogy）モデル」では，「内容」は学習指導要領に示される「内容項目」を前提としています。道徳の教材が学校教育で使用されるものであることを考えれば，その前提に問題はありません。

一方で，「特別の教科 道徳」成立とそれに伴う「道徳科教科書」の誕生によって，道徳教育関係者以外の方々もその「内容」に関心を寄せることになり，特に教科書の記述に対しては，様々な立場からの「内容」の正当性等に関わる意見を目にする機会があります。また，「哲学対話」を積極的に取り入れた道徳授業の試みなど，「道徳を教える」ことについて，従前の授業論とは異なった立ち位置から考えていこうとする道徳授業実践の動向も見られます。こうした現状に鑑み，教材論と授業論の「これから」を考える上で，「道徳を教える」ことの立ち位置をお互いに理解しながら，道徳の「内容」議論を噛み合わせることが大切であると考え，俯瞰的に考えていくための「ホワイトボード」として「４象限のモデル」を示しました。

本学会所属の髙宮正貴会員が，哲学と道徳教育を取り結ぶ立場から提言をしており，この図もそれに依拠しています。図の縦軸は「道徳を教える内容の正当性」を横軸は「道徳を教えることの可否」を示しています。髙宮会員は，「道徳には『答えがない』のではなく『答えが一つでない』」ということを考えるにあたって，「多元主義」と「相対主義」の混同を指摘し，「『相対主義』と対立するのは『普遍主義』，『多元主義』と対立するのは『一元主義』」と整理しておられます。この図の縦軸の整理には，それを援用しています。

図の横軸の「教え（られ）る」「教え（られ）ない」については，教授・学習論の観点から様々な捉え方があり，このような単純なモデルで示すことには限界があります。ここでは，「道徳を教えること」について，一般に道徳（科）の授業では「文化伝達（インカルケーション）」を前提としてきたことを踏まえて，そのカウンターストリームとして主張されてきた道徳授業論（「認知発達的接近」「価値の明確化」など）を俯瞰的に位置づけるためにこのような形で示しました。

なお，「食材モデル」も「４象限モデル」も，対談の切り口として示したものに過ぎず，普遍的・演繹的な説明モデルではないことを申し添えます。

以上，オンラインセミナーの報告として紙面を頂戴しながら，エクスキューズを長々と記してしまいました。道徳教材についてじっくり考える貴重な機会を恵与くださいました谷田会長をはじめ学会事務局の先生方，当日ご参加いただきました多くの皆様方に心から御礼を申し上げます。